

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

能楽研究所彙執(昭和59年4月～60年3月)

雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	11
ページ	196-205
発行年	1986-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020369

能 楽 研 究 所 彙 報

(昭和59年4月～60年3月)

〔紀要『能楽研究』10号の発行〕

昭和60年3月31日付で研究所紀要『能楽研究』の第10号を発行した。所員執筆の論考・展望の他に、文部省内地研究員として当研究所に留学中だった山梨大学助教授の橋本朝生氏にも執筆願った。A5版、一九二頁。内容は次の通りである。

北七大夫長能をめぐる諸問題(下の一)	表	章	1
能の演技と演出―装束付・型付をめぐる諸問題―	小田	幸子	63
中世狂言史年表	橋本	朝生	109
研究展望(昭和57年)	西野	春雄	142
研究展望(昭和58年)	竹本	幹夫	158
能界展望(昭和58年)	西野	春雄	173
能楽研究所彙報			186

〔能楽研究資料集成の発行〕

わんや書店と提携して昭和48年から継続刊行している「能楽資料集成」は、既刊の十三冊に続いて左の一冊を刊行した。

『金春安照型付集』(昭和60年3月25日発行) 第14回配本
小田幸子所員の校訂・解説。金春大夫八郎安照が高弟の中村勝三郎(熊本細川藩の能の家だった中村家の初代)に相伝した慶長十

二年奥書の装束付(二種)と、慶長十五年奥書の仕舞付(三冊)、及び勝三郎の息子伊織正辰が正保三年に著した仕舞付一冊とを翻印した。三種ともに江戸初期の能の演出史の資料として貴重で、第9回配本の『金春安照伝書集』と本冊とが一对をなす。底本は熊本市の中村勝氏(中村健次郎氏令息)蔵。B6版、二六四頁。定価四千元。会員販価三千五百円。

〔第六回観世寿夫記念法政大学能楽賞〕

昭和54年に法政大学が設定した観世寿夫記念法政大学能楽賞の第六回受賞者に、59年12月8日に開かれた選考委員会(委員は加来彰俊・広末保・小山弘志・観世栄夫・表章)で、横道萬里雄・一噌幸政の両氏を選ばれ、12月7日付で青木宗也総長名義の通知を各方面に発送した。授賞理由と受賞者の主な経歴は次の通りである。

○〔受賞者〕：横道萬里雄(よこみち・まりお)氏

〔授賞理由〕：近著『能劇逍遙』に研究・批評・評論を一体化させた成果を見せた氏は、かねて能楽の演出への関与に積極的で、近年も古曲〈雲林院〉や〈父之尉風流〉の復曲の演出決定に主導的役割を果たした。その積極的姿勢は研究者の範とすべきものであらう。

〔主な経歴〕…東京国立文化財研究所名誉研究員。大正5年生れ。東京都出身。東京帝大卒。少年時代から能楽に関心を抱き、謡・仕舞・大鼓・太鼓・小鼓を稽古し、大学も理学部から文学部に移った。卒業論文「謡曲の小段構造の研究」以来、能の構造分析・技法研究などの新領域の開拓に努め、戦後の能楽研究を著しく前進させた。観世寿夫らと提携しての実践活動や評論でも足跡が大きい。昭和27年に東京国立文化財研究所に勤務してからは、研究対象を日本の古典演劇全般に拡げ、すぐれた成果を背景に、近年は「楽劇学」の樹立を提唱している。昭和51年に東京芸術大学音楽学部教授に転じ、59年3月定年退職。昭和38年度芸術選奨文部大臣賞等を受賞、58年紫綬褒章を受章。著書「能劇逍遙」他。

○〔受賞者〕…一噌幸政(いっそう・ゆきまさ)氏

〔授賞理由〕…能における笛の演奏において、卓越した技で観客を魅了することで定評があったが、近年はとみに豊麗かつ力強さを増した演奏によって、能の音楽性・演劇性を高め、一曲の能の成功に大きく寄与している。

〔主な経歴〕…一噌流笛方。日本能楽会会員。昭和4年生れ。

東京都出身。東京音楽学校卒業。一噌操の長男。一噌流12代家元一噌又六郎の孫。幼少より祖父および一噌英二の教えを受け、戦時中から藤田大五郎に師事。初舞台は12歳で〈鞍馬天狗〉の囃子。堅実な技術の上に立つ豊かな音色で若年から逸材としての評価が高く、第一回能楽春秋会の〈邯鄲〉(シテ観世寿夫)の演奏により昭和40年度芸術祭奨励賞を受賞。横道萬里雄新作の〈鷹姫〉では初演以来笛を担当し、すぐれた成果をあげた。近

年は力強いタッチと流れるような華麗な音色とが調和した芸境を見せ、東京芸大邦楽科・国立能楽堂養成課の講師として後進の指導にもあたっている。

なお、授賞式は60年1月17日午後6時から赤坂プリンスホテルで行なわれ、受賞者両氏をはじめ、観世雅雪御夫妻・観世鉄之丞・観世栄夫・観世弘子氏ら故寿夫氏の御遺族、吉越立雄・野村万之丞・森茂好・片山博太郎氏ら以前の受賞者、檜常太郎・喜多長世・福田安男らの諸氏、および大学関係者多数の出席のもとに、青木宗也総長から賞状と賞金が授与され、レセプションに移って歓談の後、午後8時半に散会した。

〔古演出による〈葵上〉試演会の開催〕

第2回法政大学能楽研究所試演能を59年10月23日に国立能楽堂で開催した。57年の研究所創立三十周年を記念する「雲林院試演の会」に続く企画で、当日の番組は次の通りであった。

狂言 富士松(ふじまつ) 解説 能楽研究所員 表 章

シテ 太郎冠者 野村 万之丞
アド 主 野村 万作
能 葵 上(あおいのうえ)

シテ 六条の御息女 浅見 真州
ツレ 車添えの女 若松 健史
ツレ 照日の御子 山本 順之
ワキ 横川の小型 宝生 閑
ワキヅレ 朝臣 工藤 和哉

アイ 左大臣家の男 野村耕介

笛 一 嚙 幸 政

小鼓 北村 治

大鼓 柿原 崇志

太鼓 三島 元太郎

地謡 観世 暁夫 北浪 昭雄

浅井 文義 観世 栄夫

鶉沢 郁雄 観世 鉄之丞

永島 忠彦 阿部 信之

後見 浅見 真高 観世 恭秀

この催しの意図については、当日配布したパンフレット「古演出による〈葵上〉」にも記し、またそれに基づいて表所員が『観世』60年4月号に小文を書いているので、それを転載しておく。

「古演出による〈葵上〉」試演の意図 表 章

法政大学能楽研究所が「古演出による〈葵上〉」の試演を主催した理由や意図は、当日に配布したパンフレット冒頭の挨拶文に明記されている。それをお持ちでない人が多いと思われるので、その全文を転載しておく。所長名義ながら私の書いた文章である。

ご あ い さ つ

故野上豊一郎博士の法政大学における功績を記念するため設立された当研究所は、一昨年、満三十年を記念して「世阿弥本による〈雲林院〉試演の会」を催し、大方の好評を得ることができました。その成果を背景に、研究的試演能を継続的な仕事の一つに加えることとし、大学当局の諒承をも得ましたので、第二回試演能として「古演出による〈葵上〉」を選び、「橋の会」の協賛をえ

て本日上演の運びとなりました。

〈葵上〉の古演出とは、『申楽談儀』に見える近江猿楽犬王の演じ方、すなわち世阿弥時代の演出を意味します。野上博士が早くに関心を寄せていた演出ですし、それが上演可能な程度にまで究明されたのは二十五年前のことで、当研究所蔵の古写謄本の本文が端緒でした。そうした縁に基づく選択で、古演出を今に生かそうとの試みです。

〈葵上〉は現行能屈指の人気曲ですが、現今の演出に無理があることは否定できません。より台本に忠実な古演出の形を洗練すれば、その欠陥を是正し、〈葵上〉を一そう魅力ある能にできるはずです。そうした狙いで、まず一つの形を提出してみます。その是非はともあれ、この試演が〈葵上〉の演出再検討の契機になればと願っています。この企画について、御意見・御批判をお寄せいただければ幸甚でございます。

昭和五十九年十月二十三日 野上記念法政大学能楽研究所

所長 倉持 俊一

以下は右に述べてあることへの補足である。

能楽研究所が主催する能は、当然、研究的な意味のあるものでなければならぬ。昔と今で演出が違ふ曲の古い形を試演して今の形と長短を比較するとか、廃曲の中のですぐれた曲を試演してその現代的意義を探るとか、かつて野上博士が〈隅田川〉子方ナシの形の試演に努めたのと同質の狙いが望ましいから、素材は必ずと限定されている。そして〈葵上〉の古い演出は、その狙いにピッタリの対象であった。試演能第一回の「世阿弥本〈雲林院〉」の際にも有力な候補に挙げられていた。挨拶文にも言及している

ように、能楽研究所蔵の古写本の文句が端緒となって、今は梓巫女の謡っている文言が本来は青女房の謡った文句だろうことが推定された(日本古典文学大系『謡曲集(上)』補注六一)という縁もあった。

もう一つ、57年7月8日に、「橋の会」が矢来能楽堂で袴能の略形ながらその古演出を実験しており、本格的な能の形で試演してみる価値が絶対にある——今の演出よりは古演出がすぐれている——とその時に確信したことも、第二回試演能に「古演出による〈葵上〉」を選んだ大きな理由であった。だからこそ「橋の会」の協賛を仰ぐことにしたのである。矢来でのシテだった浅見真州氏が法政大学の出身で、遠慮なく意見を言える間柄なのも好条件だった。

『申楽談儀』に見える犬王の演じ方の再現が基本方針だったから、ツレに青女房を出すことと作り物の車を出すことが、古演出の眼目になる。その二点と、今は梓巫女が謡う三ヶ所——「東屋の母屋の妻戸に：」「あら浅ましや六条の：」「この上はとて立ち寄りて：」——を青女房が謡うこと、及びその最後の分の「：」わらははあとにて苦を見する」を観世流古写本の形のまま「わらはも」に謡い変えることが、能楽研究所側で考えていた古演出の必須条件であった。「橋の会」の実験の時もその形だったし、浅見氏はじめ演者側にもその基本線に異存はなかった。何度も繰返した申し合わせの過程で、「これは六条の御息所の怨霊なり：」をシテと巫女の同吟にして、巫女の口を借りての語りであることと印象づける——かつて観世寿夫氏が試みた形——とか、初同を「なり、思ひ知らずや」と観世流の古形(他流の現行の形)のように

に謡い出すとかのことが決められ、細部は上演の直前まで揺れ動いた。囃子事はほとんど今の形ですますことに、ほぼ初めから決めていたが、少々は変えたところもある。

演出についての苦労はほとんどなかったが、観客の限定には苦労した。招待者の他は往復はがきによる申し込みで先着順にしたが、かなりの人にお断りの返事を出す結果になった。すべての座席を決めたあとでどうしても断れない筋からの申し出が多くて閉口したが、法政大学の関係者が突発的な会議で何人か欠席することになって助かった。

成果はまずまずであったかと思う。装束を着ての申し合わせをしなかったため、ツレ青女房の装束が予期と違ってしまったなどの手違いはあったが、現行の演出の不備を観客に印象づけることにはなったようである。最初から完全な形になるはずはない。研究所主催の試演が能界に刺激を与えるだけで目的の過半は達せられたことになる。そうした意味でも、玄人の方が予想以上に見に来て下さったことが嬉しかった。

(以上が『観世』誌からの表所員小稿の転載)

なお、この試演能に要した費用は約150万円で、非招待者から頂戴した資料代など若干の収入はあったものの、大学の負担はすこぶる大きい。毎年継続して実施することの困難な事情が御理解いただけるかと思う。

〔野上弥生子顧問の死去〕

当研究所設立以来三十余年にわたって顧問として御協力を賜わった野上弥生子氏(野上豊一郎博士夫人)が、60年3月30日、急性

心不全のため東京都世田谷区の御自宅で逝去された。享年99歳。御葬儀及びその後の御遺族からの御芳志が次年度であった関係で、野上顧問の能楽に関する業績等は次号で詳報する。

〔雑 報〕

所長の交替

文学部長兼務が原則の当研究所所長は、学部長交替に伴ない、59年4月に哲学科の加来彰俊教授から史学科の倉持俊一教授に代わった。なお、加来教授は本学の理事に当選し、学務理事の重責を荷なわれることになった。倉持所長は西洋史専攻である。

橋本朝生氏の内地留学

山梨大学教育学部助教橋本朝生氏は、昭和59年度文部省内地研究員として、59年9月1日から60年2月28日までの6ヶ月間、当研究所で「狂言の歴史的研究」に従事された。本誌前号所載の論考もその成果の一つである。

中世文学会の開催

58年7月以来中世文学会(委員代表、表章)の事務局が当研究所に置かれている関係で、同学会の59年度春季大会が59年5月19・20・21日に本学で開催された。三日間にわたって80年館7階会議室の四室を使って当研究所及び日本文学科益田勝実教授所蔵の典籍を展観し、『展示資料目録』を印刷・配布した。19日の公開シンポジウムは「謡曲の文芸性をめぐって」の題目で、竹本所員が講師の一人を務め、表所員が司会を担当した。20日の研究発表にも、天野文雄氏「翁猿楽の成立と方堅」、関屋俊彦氏「狂言和泉流の発生」など、能楽に縁あるものが含まれ、法政大学での開催にふ

さわしい学会であった。なお『展示資料目録』の書名を本誌に別に掲載した。

国立能楽堂の特別展示への出品

国立能楽堂開場一周年記念の秋の特別展示は、「世阿弥―その生涯と業績」の主題で、59年9月15日から10月21日まで同所展示室で開催された。それに当研究所から、『二曲三体人形図』『遊楽習道風見』『拾玉得花』『五音下』『世子六十以後申楽談儀』等の写本を出品した。

また、国立能楽堂展示室の60年3月9日～4月19日の企画展「能楽海外公演の足跡」にも当研究所蔵の資料若干を出品した。

研究会活動

当研究所が主催している月一度の研究会は、前年度に引続いて番外謡曲を読む会と研究発表とをまじえながら、59年度にも継続して実施した。主として80年館会議室を使用し、出席者は平均約20名であった。

パート職員の交替

図書閲覧業務の補助を主とするパート職員は、前年度からの中久木真治君が60年5月で退職し、6月からは平川純子君と落合博志君に手伝ってもらうことになった。平川君は60年2月で退職。

図書の受贈

昭和58年10月20日に東京都練馬区の奥村貞子氏より、月岡耕魚画『能楽図絵』五帖(前篇上下・後篇上下・続篇。明治30年刊)を御寄贈いただいた。木版刷の名品として知られる同書は、これまで当研究所になかったもので、保存のよい高価な図書を寄贈して下さった奥村氏と、仲介して下さった観世流能楽師鈴木一雄氏

に篤く御礼申しあげる。

また、昭和59年11～12月に、東京都目黒区の上林あい氏から、亡夫君上林久一氏旧蔵の能楽関係図書81点一六八冊と小道具の長刀一振を御寄贈いただいた。この長刀は金剛右京氏の遺品で、故上林氏が楠川正範氏より形身として譲られた品の由である。貴重な資料を御寄贈下さった上林あい氏に篤く御礼申しあげる。上林氏からの寄贈本の書目は左の通りである。（冊数不記の分は一冊）

- 1、坂元雪鳥能評全集二冊。
- 2、能楽全書第四卷（旧版）。
- 3、同第六卷。
- 4、第七卷（総合新訂版）。
- 5、能の再生。
- 6、能の幽玄と花。
- 7、能―研究と発見。
- 8、観世左近。
- 9、万三郎芸談。
- 10、明治能楽史序説。
- 11、能（金剛巖）。
- 12、能と狂言の世界。
- 13、能面論考。
- 14、能の演出研究。
- 15、能の今昔。
- 16、鬼女山房記。
- 17、能楽三断抄。
- 18、能楽史話。
- 19、能楽大観。
- 20、能楽新風。
- 21、御世話筋秘曲。
- 22、隣忠見聞集。
- 23、豊高日記。
- 24、隣忠秘抄。
- 25、隣忠秘抄外篇。
- 26、演能前後。
- 27、狂言の道。
- 28、夏に技冬に声。
- 29、能楽今昔物語（関莊一郎）。
- 30、能楽逸話。
- 31、松韻秘話。
- 32、世阿弥（小林静雄）。
- 33、演能手記。
- 34、現代能楽論。
- 35、能楽論叢。
- 36、能小文集。
- 37、能談義。
- 38、能の面。
- 39、続能の面。
- 40、謡の位と面の話。
- 41、謡曲芸術。
- 42、芸談集。
- 43、間狂言の研究。
- 44、能楽筆陣。
- 45、大臣柱。
- 46、能楽芸話。
- 47、心より心に伝ふる花。
- 48、弥左衛門芸談。
- 49、能楽小史（多田正雄）。
- 50、広清思出話。
- 51、能の扮装。
- 52、能の表現。
- 53、鬼の研究。
- 54、能楽百話。
- 55、観阿弥と世阿弥。
- 56、能狂言（岩波文庫）三冊。
- 57、能―鑑賞のために（カラーブックス）。
- 58、六平太芸談（市民文庫）。
- 59、狂言不審紙。
- 60、私の思出。
- 61、能とは何

か。62、狂言をたのしむ。63、解剖的謡ひ様。64、謡ひ方評講。65、狂言―鑑賞のために。66、能の世界。67、能とは何か（重複）。68、六平太芸談。69、地拍子参考大倉流小鼓階梯。70、幸流手附本（幸清次郎流）。71、幸流小鼓手組一覽。72、四拍子手附大成第一輯三冊。73、型付（楠川本コピ）三冊。74、観世流謡い方講座。75、雑誌「観世」30年4月号。75、雑誌「金剛」昭和13年10号のみ戦前分）計82冊。77、能楽謡曲大辞典。78、能楽具装精華。79、私の能舞台。80、能楽源流考。

国文学研究資料館のマイクログ撮影

国文学研究資料館から昨年度に引き続いて鴻山文庫蔵謡本マイクログ撮影の許可要請があり、59年12月に高橋写真による撮影が行われた。写本の謡本は今回ですべて撮影済みである。

〔所員研究業績〕

表 章

『九品寺過去帳』抄―喜多家の分―（1）（2）（3）	〔牛尾美江氏と連名〕
『喜多』59年春・夏・秋冬号	59年6・9・12月 計26頁
能楽史周辺の問題二つ『日本文学誌要』	30号 59年8月 9頁
『能勢朝次著作集』第五卷（解説と補注）	59年9月 54頁
世阿弥自筆文書をめぐって	59年9月 3頁
国立能楽堂特別展示「世阿弥―その生涯と業績」パンフ	
京観世浅野家文書について「慶長四年福王仕舞付」その他―	
『法政大学文学部紀要』	30号 60年3月 64頁
北七大夫長能をめぐる諸問題（下の一）	
『能楽研究』	10号 60年3月 62頁

西野春雄

「松浦佐用姫」考 大槻文蔵・能の会「万葉の心」

59年4月 3頁

番外曲追跡―丸岡桂の偉業に導かれて―

『日本文学誌要』 30号 59年8月 8頁

不滅の業績―世阿弥の生涯― 『国立能楽堂』 13号 59年10月 2頁

住せぬ為手―世阿弥の生涯(続)―

『国立能楽堂』 14号 59年11月 2頁

至花の風曲―世阿弥の世界― 『国立能楽堂』 15号 59年12月 2頁

研究展望(昭和57年) 『能楽研究』 10号 60年3月 16頁

能界展望(昭和58年) 『能楽研究』 10号 60年3月 13頁

片桐登

かもせいしゆろう(賀茂清十郎) 『宝生』 59年4月 1頁

カレンダー能楽史 『能楽鑑賞の葉』 46号 59年6月 1頁

尋ね人(宝生大夫憲成・青木行方・けんぼう・狂言三声)

『宝生』 59年8月11月 各1頁

『医学天正記』の能役者 『宝生』 60年2月 1頁

文安元年山名氏勧進能と宝生 『宝生』 60年3月 1頁

田口和夫

観能小論―月待つ程の慰めに・みごひのさつくわ―

篠山春日能パンフ 12号 59年4月 5頁

狂言の獅子 蝸牛の会パンフ 2号 59年6月 3頁

〔汲水閑話〕小歌〔五月雨〕柄漏り傘

能楽タイムズ 389号 59年8月 2頁

鷺流狂言伝書―保教本(天理図書館善本叢書) 解題 59年9月 25頁

〔汲水閑話〕芋の話―天正狂言本へいもあらひの解釈

能楽タイムズ 391号 59年10月 1頁

〔汲水閑話〕世阿弥自筆能本〔江口〕から―『古事談』系説話

との出会い― 能楽タイムズ 393号 59年12月 1頁

〔汲水閑話〕鷺流狂言〔鶯聲〕―狂言稀曲考のうち

能楽タイムズ 395号 60年2月 1頁

学会展望・中世文学 昭和58年『国文学年鑑』 60年3月 7頁

竹本幹夫

世阿弥の生涯と業績 59年9月 3頁

国立能楽堂特別展示「世河弥―その生涯と業績」パンフ

世阿弥研究の現在 同右 2頁

世阿弥時代の能一覧 同右 1頁

出品解説 同右 7頁

世阿弥略年表・出品以外の世阿弥伝書一覧 同右 1頁

研究展望(昭和58年) 『能楽研究』 10号 60年3月 15頁

小田幸子

項羽と虞氏の悲話 『鍊仙』 322号 59年9月 2頁

『金春安照型付集』(能楽資料集成14)校訂・解説 60年3月 264頁

能の演技と演出―装束付・型付をめぐる諸問題

『能楽研究』 10号 60年3月 46頁

〔受贈図書〕

単行本（受入順。*印は寄贈者）

橋の会公演記録（一九八〇年～一九八三年）

* 橋の会

原色日本の意匠⁴ 桜 吉岡幸雄篇

* 京都書院

金井町史

* 金井町史編纂委員会

聞得大君加那志様御新下日記（沖縄研究資料⁴）

* 法大沖縄文化研究所

永島誠次―舞

* 永島誠次

相生市史 第一巻

* 相生市史編纂専門委員会

創造（歴史の群像¹⁰） 井沢元彦著

* 集英社

音盤目録三（改訂版）

* 東京国立文化財研究所芸能部

奈良市行政資料目録（昭54）

* 奈良市史編集室

奈良市所蔵文書目録

* 奈良市史編集室

奈良市史資料所在目録

* 奈良市史編集室

明治初年布告・布達類目録

* 奈良市史編集室

奈良市行政資料目録（昭59）

* 奈良市史編集室

仮面のはなし * 中村保雄著

P H P 研究所

演劇年報 一九八二年版 * 演劇博物館編

早稲田大学出版部

演劇年報 一九八四年版 * 演劇博物館篇

早稲田大学出版部

調査報告集 5 * 国立民族学博物館情報管理施設

早稲田大学出版部

君南風之始相伝記一（二）（沖縄研究資料⁵）

* 法大沖縄文化研究所

能劇逍遙 横道萬里雄著（* 能楽技法研究会）

筑摩書房

能―現行謡曲改題（全） * 松田 存著

錦正社

松山鏡考 * 平野考作者

奈良の庭園 * 大久保信次著

奈良市

金春流太鼓序の巻 * 金春惣右衛門著

能楽書林

球磨神楽熊本県人吉市文化財調査報告書

* 人吉市教育委員会

声明辞典 横道萬里雄・片岡義道監修

* 法蔵館

能は生きている 横道萬里雄著

* 能楽技法研究会

謡曲の音楽的特性 * 小島英幸著

小島英幸教授退官記念出版会

西洋見学 野上豊一郎著（* 西野春雄）

日本評論社

芸道 狂言特集（芸能双書⁸）（* 小林責）

石川県立能楽文化会館

日本書記研究 10 横田健一編（* 高林實結樹）

塙書房

雑誌その他

青山語文 第15号（昭60）

青山学院大学日本文学会

跡見学園短期大学紀要 第20号（昭59）

跡見学園短期大学

跡見学園国語科紀要 第31・32号（昭59）

跡見学園国語科研究室

梅 若 第262～267号（昭59・60）

梅若会

永青文庫 第11～13号（昭59・60）

永青文庫

演劇学 第25号・特別号（昭59）

早稲田大学演劇学会

謳楽 第34巻4号～第35巻3号（昭59・60）

謳楽会

岡大國文論稿 第12号（昭59）

岡山大学文学部国語国文学会

学苑 第541号（昭60）

昭和女子大学近代文化研究所

学習院大学国語国文学会誌第28号（昭60）

学習院大学国語国文学会

観 昭 第15巻4号～第16巻3号（昭59・60）

観昭会館

- 観世 第51巻4号、第52巻3号(昭59・60) 檜書店
 かんろう 第256、260号(昭59・60) 大阪能楽鑑賞会
 喜多 昭59年春・夏、秋冬号 十四世六平太記念財団
 喜多 第10号(昭34)・42年秋号・46年秋号・47年秋号 同右
 きたぐに 第176、185号(昭59) 北国川柳社
 橘香 第30巻1、12号(昭59) 梅若研能会
 紀要 第14号(昭56) 聖徳学園短期大学
 紀要 創刊号・3・4・5・7・8号(昭52・53・55・56・58・59) 明治学院大学一般教育部付属研究所
 鏡花研究 第6号(昭59) (*新保千代子) 石川近代文学館
 狂言 昭和59年 和泉会
 京都文化短期大学紀要 第3号(昭60) 京都文化短期大学学会
 研究紀要 第11号(昭59) 橘女子大学国文学科
 国学院雑誌 第85巻11号(昭59) (*天野文雄) 国学院大学
 国語国文 第10号(昭59) 金沢大学国語国文学会
 国語国文研究 第72、74号(五9・60) 北海道大学国文学会
 国文学 第61号(昭59) 関西大学国文学研究室内国文学会
 国文学科紀要 第2号(昭60) 上智大学国文学科
 国文学研究資料館報 第22・23号(昭59) 国文学研究資料館
 国文学論集 第18号(昭60) 上智大学国文学科
 国文学論叢 第29号(昭59) 龍谷大学国文学会
 国文目白 第23号(昭59) 日本女子大学文学部国語国文学会
 国立能楽堂 第8、19号(昭59・60) 国立能楽堂事業課
 駒沢国文 第21号(昭59) 駒沢大学文学部国文学研究室
 神戸学院大学紀要 第16・17号(昭59) 神戸学院大学教養部
- 金剛 第39巻2号、第40巻1号(昭59・60) 金剛雑誌会
 金春月報 第5巻4号、第6巻3号(昭59・60) 金春月報編集部
 実践国文学 第20、25号(昭56、59) 実践国文学会
 女子大國文 第95・96号(昭59) 京都女子大学国文学会
 女子大文学(国文篇) 第35号(昭59) 大阪女子大学国文学研究室
 書陵部紀要 第35号(昭59) 宮内庁書陵部
 尚謡 第41・42号(昭59) 尚謡発行所
 人文学報 第161号(昭59) 東京都立大学人文学部
 人文学論集 第18号(昭59) 仏教大学文学部学会
 人文研紀要 第3号(昭59) 中央大学人文科学研究室
 聖心女子大学論叢 第63・64号(昭59) 聖心女子大学国文研究室
 大乘 第35巻1、5号(昭28) (*籠谷真智子) 大乘刊行会
 中央大学国文 第29号(昭60) 中央大学国文学会
 中世文学論叢 第6号(昭59) 東京学芸大学中世文学研究会
 鍊仙 第317、327号(昭59・60) 鍊仙会
 伝統芸能 第345、356号(昭59・60) 京都伝統芸能懇話会
 塔 第24号(昭59) 国立音楽大学付属図書館
 東京金剛会能 昭和59年4月、60年3月 東京金剛会
 東京文理科大学文科紀要 第11号〔田楽攷〕(*西野春雄) 東京文理科大学
 (昭10) 東京文理科大学
 同朋学園仏教文化研究所紀要 第5号(昭58) 同研究所
 二松学舎大学論集 昭和58年度 二松学舎大学
 二松学舎大学東洋学研究所集刊 第14号 同研究所
 日本古典文学会会報 第101、104号(昭59) 日本古典文学会
 日本の美学 第3号(昭59) ペリかん社

- 日本文学論究 第44号 (昭60) 国学院大学国語国文学会
 日本文芸論集 第11号 (昭59) 山梨英和短期大学日本文学会
 年報 第3号 (昭59) 実践女子大学文芸資料研究所
 能 昭和59年4月～60年3月 観世能楽堂
 能 昭和59年4月～60年3月 京都観世会館
 能 昭和59年4月～60年3月 水道橋能楽堂
 能 (能楽協会報) 第27～29号 (昭57・58・59) 能楽協会
 能―研究と評論 第12号 (昭59) 月曜会
 能楽タイムズ 第385～396号 (昭59・60) 能楽書林
 能楽の友 第208～219号 (昭59・60) 能楽の友社
 能楽連盟報 第32・33号 (昭59・60) 新潟県能楽連盟
 悲劇喜劇 第363号 (昭56) * 法政大学図書館 早川書房
 富士論叢 第29巻1号～2号 (昭59) 富士短期大学学術研究会
 仏教大学研究紀要 第68号 (昭59) 仏教大学学会
 仏教大学大学院研究紀要 第12号 (昭59) 仏教大学学会
 舞踊芸術 第16巻9号 (昭59) 舞踊芸術社
 文学研究科紀要 別冊10集 (昭58) 早稲田大学大学院文学研究科
 文学史研究 第25号
 大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会
 文芸論叢 第21～22号 (昭59) 大谷大学文芸研究会
 文献ジャーナル 第270～273号 (昭59) 富士短期大学出版部
 文林 第18号 (昭58) 松陰女子学院大学国文学研究室
 宝生 第33巻4号～第34巻3号 (昭59・60) わんや書店
 宮城教育大学国語国文 第13・14号 (昭59) 同大学国語国文学会
 みやび 第21～24号 (昭59・60) コミュニティサービスKK

- 山辺道 第29号 (昭60) 天理大学国語国文学会
 立教大学国文 第13号 (昭59) 立教大学国語研究室
 わかめ 第11号 (昭59) 耕春会
 早稲田大学
 坪内博士記念 演劇博物館 第51・52号 (昭59) 演劇博物館
 CHANOYU QUARTERLY 第34号 (昭59) 裏千家茶の湯センター
 BULLETIN DE L' ASSOCIATION DES FRANCAIS DU
 JAPON 16 HIVER 1980/81 * THOMAS IMMOOS
 ASSOCIATION DES FRANCAIS DU JAPON
 JOURNAL OF CULTURAL STUDIES SPRING 1984
 * STANCA SCHOLZ-CIONCA
 PACIFIC INSTITUTE OF CULTURAL STUDIES